



有限会社 桂雛

代表取締役 小佐畑 孝雄氏

■企業概要

本社：茨城県東茨城郡城里町阿波山1186

創業：昭和5年

従業員：4名

事業内容：雛人形、羽子板、破魔弓、鎧・兜飾り、鯉のぼり、盆提灯の製造・販売

旧桂村(現 城里町)に本社を置く有限会社桂雛は、昭和5年に創業、今年で87年を迎える老舗の節句品専門店、雛人形などを製造・販売しています。

同社は、核家族化などの社会状況を受け、市場が減少していく中、日本の伝統美を徹底的に追求することで、「桂雛」を工芸品から美術品、そして、「インテリア・アート」へ昇華させました。この取り組みは、雛人形の新たな時代の幕開けといえます。

「人が生まれて初めてアートに触れるその一瞬が、人の一生を貫く本物の感性を育てていく可能性を秘めています。そのため、当社が作る雛人形は、素材や技法、表現方法はすべて『本物』でなければならないのです。」と語る小佐畑代表取締役の雛人形に対する熱い想いをお伺いしました。

(インタビュー日：平成28年12月26日)

(聞き手：筑波総研(株) 専務取締役 藤咲耕一)

創業の歴史についてお聞かせください。

■ 桂村で生まれた雛人形「桂雛」

当社の歴史は、私の祖父 小佐畑喜士が、明治、大正にかけて栄えた水戸・水府雛作りを修行し、

人形作家として桂村(現 城里町)で独自の雛人形を製作したことに始まります。

昭和20年に自宅を改築し、「小佐畑人形店」を開業。妻の静江とともに「桂の雛人形(桂雛)」を製造・販売し、平成3年には茨城県郷土工芸品に指定されました。

その後、平成4年に喜士の長女で私の母である初江が人形作家「喜風」二代目を襲名。その2年後には、海部俊樹元内閣総理大臣が団長を務めるトルコ友好使節団の一員として参加し、イスタンブールに桂雛を展示するなど、国外への発信活動も行うようになりました。

小佐畑代表取締役様が事業に関わるようになった経緯についてお聞かせください。

■ 人生を変えたある雛人形との出会い

私は桂村で生まれ、幼い頃から雛人形がある生活に慣れ親しんで来ました。地元中学と茨城高校を卒業後、都内にある大学の情報通信工学科に進学しました。

雛人形とはあまり縁の無い学生生活を送っていた時、都内で行われていた雛人形の見本市で、私の人生を変えたある雛人形との運命的な出会いがありました。

私は、雛人形がまとう着物の伝統的な文様や色使いに心奪われ、雛人形の職人になることを決意。大学を中退して、静岡県大井川町(現 藤枝町)にある人形店へ修行に入りました。

■ ベールに包まれた雛人形の世界

人形業界は、親子にしか技術を伝承しない閉鎖的な面があります。そのため、“ベールに包まれた世界”というイメージを抱く一方、その謎めいた世界観が、逆に外部の方から興味を持っていただけることもあります。

私が静岡県の人形店へ修行に出たのは、その工房が珍しく親子以外の外部の人間も受け入れ、技術を伝承してくれるからでした。

修行を終え当社に入社した私は、平成8年に人形作家「喜風」の三代目を襲名しました。平成16年には有限会社桂雛として法人化し、同時に代表取締役役に就任しました。

事業拡大プロセスについてお聞かせください。

■ 時代の変化に対応した雛人形作りを模索

今から20年前、雛飾りは段飾りが主流で、雛人形は飛ぶように売れる時代でした。

しかし、最近は核家族化となり、家も狭く、大きく豪華な雛飾りの人気は低下傾向にあります。

また、お客様の中には、「子どもが小さい頃は雛人形を飾るが、それも2~3年で終わってしまう」「心のどこかで、雛人形を飾らなければならないという“義務感”を感じている」と話す方もいらっしゃいました。

実際、15年ほど前からお客様が少しずつ離れ、年商が現在の半分以下になってしまったこともあります。



「雛人形を楽しく飾って欲しい」と語る小佐畑代表取締役

■ 「節句品」から「インテリア・アート」へ

私は、いつの日か雛人形がお客様から飽きられてしまうのではないかと危機感を持ち始め、雛人形を楽しく飾って頂くために、当社は今後どうしたらよいのか、試行錯誤の日々を過ごしました。

そこで当社は、日本の伝統美を徹底的に追求することで、「桂雛」を工芸品から美術品、そして、「インテリア・アート」へと昇華させていきました。この取り組みは、雛人形の新たな可能性の扉を開けることになったのです。



モダンな展示スペース

■ 生まれて初めて触れるアート

私は、雛人形が単なる縁起物や飾り物を超えて、子どもの瞳に映る1番最初のアート作品であると捉えています。

人が生まれて初めてアートに触れる瞬間、もしかしたら記憶にも残らない出来事かもしれませんが、その一瞬が人の一生を貫く本物の感性を育てる可能性があります。

以前、筑波大学教授（現 札幌市立大学学長）の蓮見氏から嬉しいお言葉を頂いたことがあります。

「子どもの感受性を育むには、地域に根付いた風習や昔からの文化に触れさせること、それが一番良いことだ。だから小佐畑さんの仕事は意義があるのだよ。」

この言葉は今でも私の心に刻まれ、私の支えとなっています。雛人形が子どもたちの感性を育む日常のアート作品になるために、当社は雛人形の表情や素材、表現方法に至るまで、全て「本物」を追求し続けていきたいと考えています。

「桂雛」の魅力についてお聞かせください。

■ 伝統工芸品産業大賞を受賞

当社は伝統技法で製作した雛人形をはじめ、羽子板、破魔弓、鎧・兜飾り、鯉のぼり、盆提灯などの節句品を製造・販売しています。

歴史の中で培われた伝統技法や日本の風土から生まれた独特の色彩、文様を節句品に託し、現代の住環境に合う商品を生み出しています。

主力商品は、天皇の結婚式の様子を模した親王飾りです。3月だけでなく、年間通じインテリアとして飾れるよう、屏風や飾り台にも工夫を凝らしています。

また、一般的に雛人形の体部は分業製作ですが、当社は手作りで一貫製造しています。当社の技術力は高い評価を頂き、数々の賞に輝いています。



雛人形作りの作業風景

■ お客様の生活を豊かにする「桂雛」

当社の雛人形は、繊細な表情や仕草、鮮やかな色彩、文様が描かれた着物など伝統とモダンを兼ね揃えた凛とした美しさが特徴です。

色は様々な意味や力を持っています。例えば、青は女性の繊細な想い、赤は命の大切さを示す色といわれています。

以前、大病を患ったというお客様が来店した際、「赤色の着物を着た雛人形を見たら、生きる力が湧いてきた」と言い、そのままご購入されたお客様がいらっしゃいました。

私はこの体験から、色彩や文様の持つ力の偉大さ、そして節句だけではなく、いつも家に飾っていただくことで、お客様の生活を豊かにできるという雛人形の価値を再認識することができました。

■ 美しいグラデーションが心を癒す

当社の雛人形は、平安時代に確立した色の組み合わせ「かさねの色目」を取り入れています。



横から見た女雛と2階の展示スペースの様子

雛人形は正面から見るのが一般的ですが、私は美しい着物のグラデーションを見るために、上や後ろからも眺めてみることをお勧めしたいです。

着物の裾の優雅な流れ、鮮やかなグラデーション、仕立ての良さなど、360度どこから見ても美しい雛人形の姿は、見る人の心を癒してくれることでしょう。

■ 地域の伝統工芸の活性化に繋がりたい

当社が使用する布は、祖父の代から含めると約200種類あります。特注の京都西陣織やユネスコ無形文化遺産に登録された結城紬、水戸黒染め、スイス製シルクなど多岐にわたります。

また、生地裏には常陸大宮市の西の内和紙を使用しており、地域の特産物を積極的に活用することで、地域の伝統工芸の活性化にも繋がっていきたいと考えています。



水戸黒で染められた着物を着た雛人形

■ 地域の子供たちに「日本の美」を伝えたい

私は、地域の子供たちに対して雛人形に関心を持って頂きたいと考え、課外授業の講師として地域の小学校を訪問しています。

授業で節句文化や色彩、文様の美しさを教えることで、地域の子供たちに「日本の美」や「地域の伝統」を伝えていきたいと考えています。

他社との差別化についてお聞かせください。

■ パターンオーダーメイドの雛人形を製造

当社は、平成26年に経済産業省の地域産業資源活用事業計画として「コンシェルジュ型パターンメイドによる別誂え雛人形の開発及びブランド化による地域活性化事業」計画に応募し、認定を頂きました。

これは、桂雛の基本仕様や特徴などを活かしつつ、私がお客様のコンシェルジュとなり、お一人おひとりの想いを人形の表情や仕草、着物に反映し、特別な雛人形を作るサービスです。

雛人形業界において、パターンオーダーメイド商品を製造しているのは当社のみです。当社の強みである伝統技法による一貫製造、直接販売だからこそできるサービスであると自負しています。

今後も同事業を展開していくことで、自社のブランド力強化を図っていききたいと考えています。

今後の事業戦略についてお聞かせください。

■ お客様との繋がりを大切に

現在、桂雛は水戸京成百貨店をはじめ、東京六本木のミッドタウンなどでも販売しています。大変嬉しいことに、売れ行きは好調です。

また、城里町の「ふるさと納税」50～100万円の礼品として桂雛を選定していただいたことで、都内のお客様との繋がりも生まれました。

これからも広報活動を行いながら、今後益々増えていくお客様の多様なニーズにしっかり応えて参ります。そのためにも、スタッフの育成などに注力しながら、製造体制の強化を図っていききたいと考えています。

■ 「桂雛」が新たな時代を創る

桂雛は節句品の既成概念を超え、季節を問わず飾ることができる「インテリア・アート」という位置を確立いたしました。これは雛人形の新たな時代の幕開けになると確信しています。



壁面に飾られた女雛

私は、海外のお客様にもインテリアとして桂雛を楽しんでいただき、その価値を世界中に広めていきたいと考えています。

私が海外で驚いた女雛の飾り方は、壁と平行に座らせることで、扇のような形と着物の美しさを楽しむ方法でした。このような斬新で新しい飾り方は、海外ならではのアイデアです。

これからも、多くの可能性を秘める桂雛とともに、職人、そして、アーティストとして精力的に活動して参ります。



小佐畑代表取締役(中央)、
泉町支店 谷口支店長(右)と聞き手・藤咲耕一

この度は、長時間にわたり貴重なお話を聞かせていただきまして、誠にありがとうございました。御社の今後益々のご発展をご祈念いたします。

■ 文責・写真：筑波総研株式会社 研究員 富山かなえ